

A 語句の意味と読み

(1) 読みは「おほし」(現代仮名遣いでは「おおし」)／意味は「数が多い・たくさんある」。
／★送り仮名は「し」だけ。
「蕃」は草木が茂る意の字で、そこから「多い」の意になる

(2) 読みは「よりこのかた」／意味は「～から以後ずっと・～から後は」。
／★「来」を「きたる」と読まない。時を表す語のあとに付いて、そこから今までを指す言い方

(3) 読みは「おでい」／意味は「水底にたまった汚れた泥・どろ水」。
／★どちらの字も「どろ」を表す。これが「けがれた俗世」のたとえになる。ここを外すと主題まで崩れる

(4) あやしいほど色っぽい。なまめかしくあでやかだ。(ここは「人の目を引くようにあでやかになりすぎることはない」の意。)
／★現代語の「妖怪」の意味で取らない。「妖艶」の「妖」と同じ使い方

(5) 読みは「ますます」／意味は「いよいよ・ますます」。
／★「えき」「やく」と音で読まない。下の「清く」を強める副詞として使われている

(6) 読みは「せつぐわん」(現代仮名遣いでは「せつがん」)／意味は「なれなれしく手に取ってもてあそぶこと」。
／「褻」はふだん着・くだけた意、「翫」はもてあそぶ意。合わせて「気安くいじりまわす」

(7) 読みは「すくなし」／意味は「ほとんどない・まれである」。
／★「あざやか」ではない。ここは「少」と同じ意味で使う字。送り仮名は「し」だけ

B 句法

(8) 書き下しは「蔓せず枝せず」(教科書によっては「蔓あらず枝あらず」)／意味は「つるを出さず、枝分かれもしない」。
お使いの教科書の読み方に合わせる。／★「不～不～」で否定を二つ重ねた対句。よけいなものを伸ばさない蓮の姿を表す

(9) 「可～而不可～(～すべくして～すべからず)」の形で、可能と不可能を対比させる句法。「べし」は「～できる」という可能、「べからず」は「～できない」という不可能を表す。※「べからず」を「～してはならない」(禁止)と訳す教科書・注釈も多い。いずれにしても、可(～できる)と不可(～できない・してはならない)を「而」ではさんで対比している点が必要。お使いの教科書に合わせる。／★白文は「可遠観而不可褻翫焉」。「而」がはさまって前後を対比している

(10) 読みは「よおもへらく」。「予謂へらく」は「私が思うことには」の意で、あとの「蓮は花の君子者なり、と」の「と」までを受ける。「謂へらく～と」で引用をくくる形。／★「いへらく」と読む教科書もある。どちらも「～と思うことには」／言うことには」で、文末の「と」と呼応する点と同じ

(11) 「Aは…である」と断定・判断を表す形。白文は「菊、花之隠逸者也」で、主語が「菊」、述部が「花之隠逸者(花の隠逸者)」、文末の「也(なり)」が断定を表す。同じ形が「牡丹、花之富貴者也」「蓮、花之君子者也」と三つ並ぶ。／★「菊」のあとで一度切れる。三つを同じ形で並べて分類している

(12) 読みは「なんびとぞ」。「私と同じ(蓮を愛する)者が、いったい誰がいるだろうか」の意で、疑問の形をとりながら「自分と同じ者などほとんどいない」という嘆きをこめた反語的な言い方。※教科書によっては「私と同じ者は何人いるだろうか」と人数に訳す(人数をたずねるときは「幾人」を使うことが多い)。お使いの教科書に合わせる。／★「なんにん」と読まない。「何人」は本来「どういう人・誰」の意。文末の「ぞ」が疑問・反語の結び

(13) ここでは「むべ」と読み、「宜なるかな」で「もっともなことだなあ・当然だなあ」の意。再読文字としては「よろシク～(ス)ベシ」と読み、「～するのがよい」の意になる。／★「かな」は感嘆を表す。ここは再読しない読み方をする

C 主語・指す内容

(14) 晋の陶淵明。／★直前の一文に人名が出ている。「独り」は、その人を世間から切りはなす働きをする

(15) 蓮(の茎)について述べたもの。「中」は茎の内部で、空洞になっていて通っていること、「外」は茎の外側で、まっすぐに伸びていることをさす。／「予は独り、蓮の～を愛す」という長い一文の途中。ほめている相手はずっと蓮で、文末の「愛す」の主語が「予」

(16) 作者の周敦頤自身。／★「予」は「わたし」。本文中の「予は独り」も同じ人物。文章の最後で自分の立場を名のっている

(17) 「陶」は陶淵明(②で菊を愛した人物)。陶淵明より後には、菊を愛したという話をほとんど聞かない、ということ。／★菊＝隠者の花。菊を愛する人が絶えたということは、世を捨てて生きる人がいなくなったという含みをもつ

D 口語訳

(18) 水の中や陸の上に生える草木の花で、愛でるにあたいするものは、たいそう数が多い。

(19) 蓮が、泥水の中から生え出ても(泥に)染まらず、清らかなさざ波に洗われてもなまめかしくあでやかにはならない(こと)。

(20) 香りは遠くまで漂っていよいよ清らかで、すうりと高くまっすぐに、清らかに立っている。

(21) 牡丹を愛する人が多いのは、いかにももっともなことだなあ。

E 内容・記述

(22) 汚れた泥水の中から生え出ながら、その泥に染まらずに清らかに咲く様子を表す。けがれた俗世の中にいながら、その悪い風潮に染まらない高潔な人（君子）のあり方をたとえている。

(23) 遠くから敬意をもって眺めるべき気高さをそなえ、なれなれしく手に取っていじりまわすことを許さない、おかしがたい品格。（作者が理想とする君子の近づきがたい気品を表す。）

(24) 菊＝隠逸者（俗世を避けて隠れ住む隠者）、牡丹＝富貴者（財産と地位のある人）、蓮＝君子者（学問と徳をそなえた立派な人）。／★「菊は…なり、牡丹は…なり、蓮は…なり」と同じ形が三つ並ぶ。答えは本文から抜き出せる。入れかえて問うのが定番

(25) 富貴を追う世の風潮を嘆き、泥に染まらぬ蓮のような清く高潔な君子の生き方を理想とすること。（四十四字）／「牡丹を愛する人が多いのもっともだ」は、ほめ言葉ではなく世相への皮肉。嘆きと理想の二本立てで書く

F 文学史・思想

(26) 周敦頤（しゅうとんい）／中国・北宋の人。／『太極図説』の著者で、のちの朱子学に大きな影響をあたえた儒学者

(27) ある物事を取り上げて、それについて自分の考えや意見を述べる文章の形式。（ここでは「蓮を愛するわけ」を語りながら、自分の理想の生き方を述べている。）

(28) 東晋の詩人。官職を捨てて田園に隠れ住み、菊を愛したことで知られる。「帰去来辞」「桃花源記」の作者。そのため本文では菊が隠者の花とされている。／★陶淵明＝菊＝隠逸者、というつながりを押さえておく⑩の対応が思い出しやすい

【現代語訳（全文）】

水の中や陸の上に生える草木の花で、愛（め）でるにあたいするものは、たいそう数が多い。晋の陶淵明は、ただひとり菊の花を愛した。唐の時代から後は、世間の人々はたいそう牡丹を愛している。

私はただひとり、蓮が、泥水の中から生え出ても泥に染まらず、清らかなさざ波に洗われてもなまめかしくあでやかにはならず、茎の中は空洞で通り外はまっすぐで、つるを出さず枝分かれもせず、香りは遠くまで漂っていよいよ清らかで、すらりと高くまっすぐに清らかに立ち、遠くから眺めることはできても、そばで手に取ってもてあそぶことはできない——そのようなところを愛するのである。

私が思うには、菊は花の中の隠者であり、牡丹は花の中の富貴な人であり、蓮は花の中の君子である、と。ああ、菊を愛することは、陶淵明より後にはほとんど聞かない。蓮を愛することでは、私と同じ者は、いったい誰があるだろうか（＝私と同じ者などいない）。※「私と同じほどの人は、どれほどいるだろうか」と人数に訳す教科書もあります。牡丹を愛する人が多いのは、いかにももっともなことだなあ。